

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第16号 令和6年(2024年)3月4日発行

暦の上では春となりました。実践校の皆様におかれましては、年度末に向けて日々児童生徒に全力で向き合っていただいていることと思います。

プロ研通信第16号では、2月9日(金)に総合教育センターにて開催しました、第66回研究発表大会を振り返ります。本研究を通して、研究委員の皆様をはじめ、実践校のみなさまには大変お世話になりました。研究発表大会を迎えるあたり、皆様と共に学ばせていただいたことを思い浮かべながら準備を進め、当日の発表に臨みました。その様子をお伝えします。

第66回研究発表大会 校内研究活性化 プロジェクト研究発表

研究発表の流れ

1. 研究員による研究の発表
2. 研究委員による実践発表
3. 質疑応答
4. 指導助言



研究員による研究の発表

今回、県内外合わせて100名を超える先生方が私たちの研究発表を聞きに来てくださいました。参観者の多さから、校内研究に対する関心の高さとその重要性を感じる事ができました。

発表は「主題設定の理由」から始め、「研究の基本的な考え方」「研究の内容とその成果」「研究のまとめ」の順で行いました。校内研究の活性化に向けて実践していただいた研究委員の先生方の取組の紹介を通して、研究の成果が参観者に届くよう発表しました。



発表の様子

実践校5校分の「校内研究省察ポスター」を会場内に掲示しました。また、校内研究活性化に向けての取組のポイントをまとめたリーフレットを配付しました。



各種資料



二次元コードから御覧ください。

当日の発表の内容は、当センターHPからオンデマンド動画として見る事ができます。御都合がつかない方は二次元コードから動画を御覧ください。また、「研究発表資料」をダウンロードしていただくことも可能です。併せて御覧ください。

発表資料



令和5年度(2023年度) 校内研究活性化プロジェクト研究

「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう、
小・中学校における校内研究のあり方

—教員一人ひとりのニーズに応じた
「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して—

研究員 梶谷 圭吾
島内 佑祥

SPC 滋賀県総合教育センター
Shiga Prefecture Education Center

研究委員による実践発表

今年度の各実践校の校内研究での取組について、研究委員の皆様へ実践を発表していただきました。

教員対象の質問紙調査の結果から、「個別最適な学び」を教員自身が経験することにより、より「個別最適な学び」をイメージすることができることが分かりました。そこで、参観者にも「個別最適な学び」をしていただきたいという思いから、各実践校の取組を基に研究員がグループテーマを設定し、参観者一人ひとりに自分のニーズに合った実践の発表を聞いていただきました。



グループ	グループテーマ
A	「個別最適な学び」を支える校内研究のもち方
B	「個別最適な学び」を充実させる校内研究の取組の工夫
C	「協働的な学び」を活性化させる校内研究のもち方
D	校内研究を活性化させるための管理職との連携
E	個人の課題解決に向かうための協議の進め方

参観者アンケートには以下のような御感想をいただきました(一部)。

- ・研究委員の先生方から直接、実践についてうかがえる機会をいただけたのがありがたかったです。
- ・自身が「個別最適な学び」を体験でき、とてもよかったです。確かに主体的になって実践校の取組を聞いている自分がいました。
- ・研究委員の先生方の話を聞く時間が有意義に感じました。もう少し時間を長くできるとうれしいです。

実践の発表を通じて、参観者の皆様には多くの学びを得ていただきました。また、研究委員のみなさんには、短時間ではありましたが今年度の実践をアウトプットしていただくことで、自校の校内研究に対してより深く分析し、成果と課題について振り返っていただけたのではないかと思います。今年度の実践から見えてきた成果と課題を次年度の各校の校内研究の実践に生かしていただき、さらなる活性化につなげていただければ幸いです。研究委員の皆様、本当にありがとうございました。

滋賀大学大学院教育学研究科 教授 辻 延浩先生による指導助言

総合教育センターのプロジェクト研究、特に、校内研究活性化プロジェクトには、5年以上トータルアドバイザーとして関わっております。これまで、発表の形は様々ですが、非常にリニューアルされています。本日は、その経緯も含めて、成果を話させていただきます。



滋賀大学大学院教育学研究科
教授 辻 延浩先生

1. 校内研究活性化プロジェクト研究立ち上げの経緯

午前中の溝上先生の御講演にもありましたように、昨今、「主体的・対話的で深い学び」ですとか、「カリキュラム・マネジメント」とか、「開かれた教育課程」とか、「学びの羅針盤」、「個別最適な学び」、「協働的な学び」、「令和の日本型教育」など、矢継ぎ早にどんどん新しいワードが出てきています。しかし、これらは教育の背景として、Society5.0とか、AI時代到来とか、いわゆる今までの、教師が教えて子どもがそれを覚える、そういう教育ではだめですよとずっと言われてきたのです。そのことを、形を変えて、印象的な言葉で綴られているように、私は理解しています。

では、本質は何なのか、それは、子どもの学習観と教師の指導観のパラダイム転換です。その指導観を変えようと思うと研修観を変えていく必要があります。先ほど「技術的实践ですか」という質問がありましたが、根本は技術ではないのです。いわゆる「観」、「哲学」です。「子どもはどういった学習を求めているのか」「学習していったその先、未来の自分をどう描くのか」「教師はその子どもの育ちを保障するために、どのような授業をこれからやっていくのか」ということを真剣に考えましょう、というところが、このプロジェクト研究の根本にあります。この流れを受けて、様々な教育的活動がある中で、一日の大半が授業ですので、授業改善、授業改善を中心とした学校改善、いろいろと子どもの育ちを保障していこうということで、校内研究活性化プロジェクトが立ち上がっています。

2. 校内研究活性化のキーワード

キーワードは、ここ3年間ずっと同じです。「主体的」「組織的」「継続的」です。

(1) 主体的

「主体的」というのは、校内研究の視点で言えば、教師が校内研究・校内研修に対して主体的であるにはどうすればよいか。自分事として校内研究を受け止めて、どう研鑽、授業改善していくのか。従来のように、年中行事、教育課程の中に定期的に埋め込まれていて、各学年1回の公開授業をして、その後に、全体で集まって検討会をするという従来からある制度を見直しましょうということなのです。

いろいろな業務や状況、あるいは教員の経験の幅がある中で、一つのテーマ、一つの話題について、全員で検討することが本当に効率よいのかといったところの洗い直しですね。そこで出てきたのが、「自分事」「自己目標」「自己決定」。20代の先生の自己決定はどこから来るのか。悩み事は何なのか。ミドルの先生の自己決定、研修課題は何なのか。それらは異なるはずですが、しかし、研究主題が一つだと、「どこに照準が当たっているのか。それは顔の見えるテーマになっているのか」と考えた時に、クエスチョンマークが付きます。研究主任がちょっと考えた、時代の流れ、〇〇校はこういうテーマでやっていたからということが結構ありますよね。そういうところを洗い直すために、「自己目標設定シート」とか「授業アップデートシート」というツールを活用して、一人ひとりが自分の授業をちゃんと自己評価して、自己決定して、「これをやりたい」「ここを目標に取り組んでいきます」というところを出し合ひましょう。その道具を見れば技術的な

実践に見えるかも知れないですが、あくまでもツールで、根本にあるのは「自己選択」と「自己決定」です。

(2)組織的

二つ目が「組織的」です。業務の多忙化で、働き方改革を進めて継続的にするには小回りを効かせないといけないということで、課題別グループの組織化とか、小集団とか、G-OJTという職場の中で、研修とコラボされています。そのようにすると、「うまくいった」「先生たちが前のめりになった」、溝上先生の言葉を借りれば「主体的になった」という組織になっていきます。ただし、この組織の中に、「フィードバック」と「カンファレンス」、もっと言えば「リフレクション」が作用しないと変わらないので、そこをコーディネートするグループリーダーが必要です。課題別グループを作って、その中にグループリーダーをどう組織するかが非常に難しいです。研究主任と研究推進部との話し合い、もしくは、管理職との連携の中で、「見込みのある教師」とかいう表現をされる、もうすでにこの研究をよく理解していて、やる気があり、リーダー的素養を兼ね備えた人にリーダーになってもらいます。それと同時に、若手やいろいろな立場の人とコラボしてもらうというミニ集団をいくつか作れば、「研究主任一人が引っ張っていくという形」ではなく、「いろいろなサポートを得ながらうまく継続したな」という実践報告が昨年度あたりから出てきました。ただし、大規模校であればそれなりの人が集まるかも知れませんが、小規模校であればどうするのか。「一般的にこんな方向がよい」というのが見えていても、学校によって異なります。地域性や規模によって違うので、「うちの学校ではこういう風なところをやればうまくいった」という組織的なところについて、いろいろ持ち帰ってもらって、御意見をもらいましょうということで、昨年度と今年度は、小中のメンバーが違う中で、様々な取組をやってきたということです。

その一つに、G-OJT 研修ですとか、「『共通実践レビュー』シート」というツールがあります。それぞれの先生の授業をどう見て、どう解釈したか、それをきちんと交流しましょう。その先生の見方を尊重しましょう。認め合いましょ。一堂に会した場合、声の大きい先生、もしくは経験値の高い先生が話すと、それがそうなのだという風に個が集団に埋没されてしまうので。課題別グループ、しかも、主体的なところで、目標をすり合わせ、それぞれの先生の悩みを分かち合えている、強みも弱みも悩みも分かり合えているからこそ言い合えるというようなグループをつなぎ合わせていくことが組織的には大事です。

(3)継続的

三つ目の「継続的」です。いわゆる、学んだことを生かすということです。ここが非常に難しいのですが、今年度、総合教育センターでは研究と研修をうまく往還させておられます。昨年度の研究成果、昨



辻先生による指導助言の様子

年度の成果物を先ほどのようなパネル発表のように、今年度初めて校内研究主任になられた方に来てもらい、研修という形で、この流れを理解して、いろいろ質問をして、持ち帰ってもらった。そして、各学校の研究推進部にその中でできること、できないことというようなところを伝えていかれた。総合教育センターがリーダーになって、研究と研修を組織し、校内の研修につないでいくといったことを、見える形で今回やられました。それが、今までにはなかった一つの成果だという風に思っています。

もう一つ「継続性」という時に、よくあるのは、「内容の継続性」と「方法の継続性」です。

「内容の継続」というのはテーマです。大体これは、私の経験からすれば、2年ないしは3年同じテーマを積み上げた方が成果は出ます。4年次になると教員が入れ替わるなどから、飽和状態になるのであまり成果が出ないことが多いです。3年次くらいになると研究の進め方などを理解できてきているので、細かく国語科であれば国語科の課題づくりから様々なことが共有できます。しかし、一つの教科を3年やるというのは、「他の教科もやりたい」とかいろんなことがありながら継続させていく分、難しさはあります。

しかし、「方法の継続性」というのは違います。その学校のオリジナル、「〇〇スタンダード」って最近よく出てきますよね。その学校での、子どもの学びと同時に、教師の研修の仕方とか、授業公開のスタンダードをつくれれば、それはずっと継続できます。

今、学んだことを生かそうと思った時には、そういった「内容の継続性」と「方向の継続性」が基になります。それが、研究主任のリーダーシップに任せられた場合には、研究主任のやってきたこと、経験してきたことがベースになるケースは時々ありますよね。その場合、「いや、うちの学校では、それは違うんだ」とはなかなか言えませんよね。そういったところで、研究主任が変わるごとに方法が変わって継続性が続かないケースもありますので、そこはやはり研究推進部、そしてその学校での研修の土台といいますか、方法の土台というものを一定つくるのが大事かなと思います。そういう意味では、昨年、今年と、この研究プロジェクトをつくられた校内研究活性化に向けた方法というものを、みなさん、今日も含めて研修で学ばれた方が持ち帰られて、スタンダード化されていくと、「滋賀県としてのモデル」ができていくのではないかなと思います。それを、研究と研修の一体化、往還ということで継続性を担保できないかと思います。

3. 子どもの学習観を根底から変えるために

先ほどの学習観と指導観、評価観との関係からいいますと、研究と研修、さらには「教育」まで視野に入れて欲しいと思います。研究、研修は教師の立場です。教師が学んでいます。しかし、目的は子どもを育てることです。子どもをいかに育てるか。子どもに返していくためには、研修施策を教育に生かさないといけない。教育の成果、研修の成果、効果を、子どもの育ちとして丁寧に見取っていただきたいと思います。そうした時に、子どもから見たら、先生達が研修していることって意外と見えます。「あの先生の授業、改善されているな。でも、この先生は改善されていない」と子どもには見えます。「この先生の授業スタイル変わらないな」よくよく分かります。子どもは柔軟ですから、ある先生が授業観、研修観を変えると、それに順応して先生のスタイルに合わせていきます。評価観も新しくいろんなパフォーマンス評価とかルーブリックといわれても、先生によって違うと子どもは混乱します。小学校は小学校なりの難しさがありますし、中学校、高等学校は、教科の壁など、いろいろなところで難しさがあります。けれども、子どもの学習観を本当に根底から変えていこうと思うと、教員組織の評価観、授業づくり観をある程度共有していかないとけません。それが「研究、研修、教育の三位一体化」なのです。子どもから見える授業とか、子どもから見える世界に軸をおいたら、私達教員が、ちょっと歩いていくというか、変わっていく、パラダイム転換につなげていかなければならないところが見えてくると思います。今日の午後の研究発表でも、社会科の授業で国語科の書くこととコラボする、特別活動と体育科の授業のカリキュラム・マネジメントとか、いわゆる一つの教科だけの授業づくりではなくて、連動させていこうというような教育研究発表が多くなってきています。そのあたり、そういう考え方が根付いてきたのではないかなという風に思います。ですので、今日、発表を聞かれた内容を、ぜひ持ち帰っていただいて、学校の中でどうするのか。ここはうまくいったといったところで、成果をお寄せいただく。「この部分まだ工夫できるよ」「課題はここにある」となれば、また次のプロジェクト研究でその課題に向かうことで、センターと現場、学校との往還がなされていきます。研究センター、研修組織、大学の研究組織と現場との連携が図れるのではないかという風に思います。

参観者アンケートより

県内外、多くの先生方に研究発表を御参観いただき、たくさんのお感想・御意見をいただきました。その一部を紹介します。

- ・ 教員一人ひとりに強みやアイデアがあるのに、それが若手であるために、校内に伝える機会が少ない状況があると思います。今日発表されたように校内研究会で交流する時間があると充実した時間になると感じました。精神的に辛い思いをする教員も増えているので、教員間のつながりを作って雰囲気を高めることを大切だと感じました。(30代・中学校教員)
- ・ 校内研究が近づくと「どうしようか…」となかなか前向きになれない私ですが、いざ始めてみると、学年団で何をゴールにするか、どういう手立てにするか具体物など考えて、だんだん楽しくなってくる私もあります。子どもだけでなく教員の「個別最適な学び」と「協働的な学び」が、子ども一人ひとりの力になっていくのだと思い「常に勉強、研究、主体的に」の気持ちでがんばります。(40代・小学校教員)
- ・ 授業改善のための校内研修についていろいろご苦労されて実践されていることを知りませんでした。高校では教科の違い等あり、なかなかしっかりと校内研修ができていない現状があります。少しずつ取り組んでいかなければならないと思いました。(50代・高校教員)
- ・ 教員にとって「個別最適な学び」と「協働的な学び」という視点で考えると、校内研究での学び方を授業に取り入れるなど、共通実践がしやすくなると思います。研究主任だけではなく、管理職のリーダーシップのもとで学校全体が意欲的に校内研究に取り組んでいくうえで、この研究の成果物や実践は大きく役立つものとなっています。(40代・教育委員会)
- ・ 昨年度、NITSの学校組織マネジメントを受講し、どうすれば校内研究を活性化できるか、共通理解・共通実践をより進められるか考える機会をいただきました。本日は、実際に取り組まれた内容をお聞きでき、よい刺激を受けました。また、学校内だけでなく「学校間でつなぐ」という視点も参考になりました。(40代・教育委員会)

この他にも、様々な年代の方から御感想・御意見をいただきました。研究発表を通じて、多くの方にとって校内研究を改めて考える機会になったことがアンケート内容から伝わってきました。

研究発表大会を終えて、研究員の思い

研究発表大会が終わり、1年間の研究に一区切りがつかしました。この1年間を振り返ってみると本当に多くの方と出会い、その一人ひとりからいただいた様々な支えのおかげでここまでやってこられたことを改めて実感します。研究委員の先生方をはじめ、各実践校の先生方には大変お世話になりました。

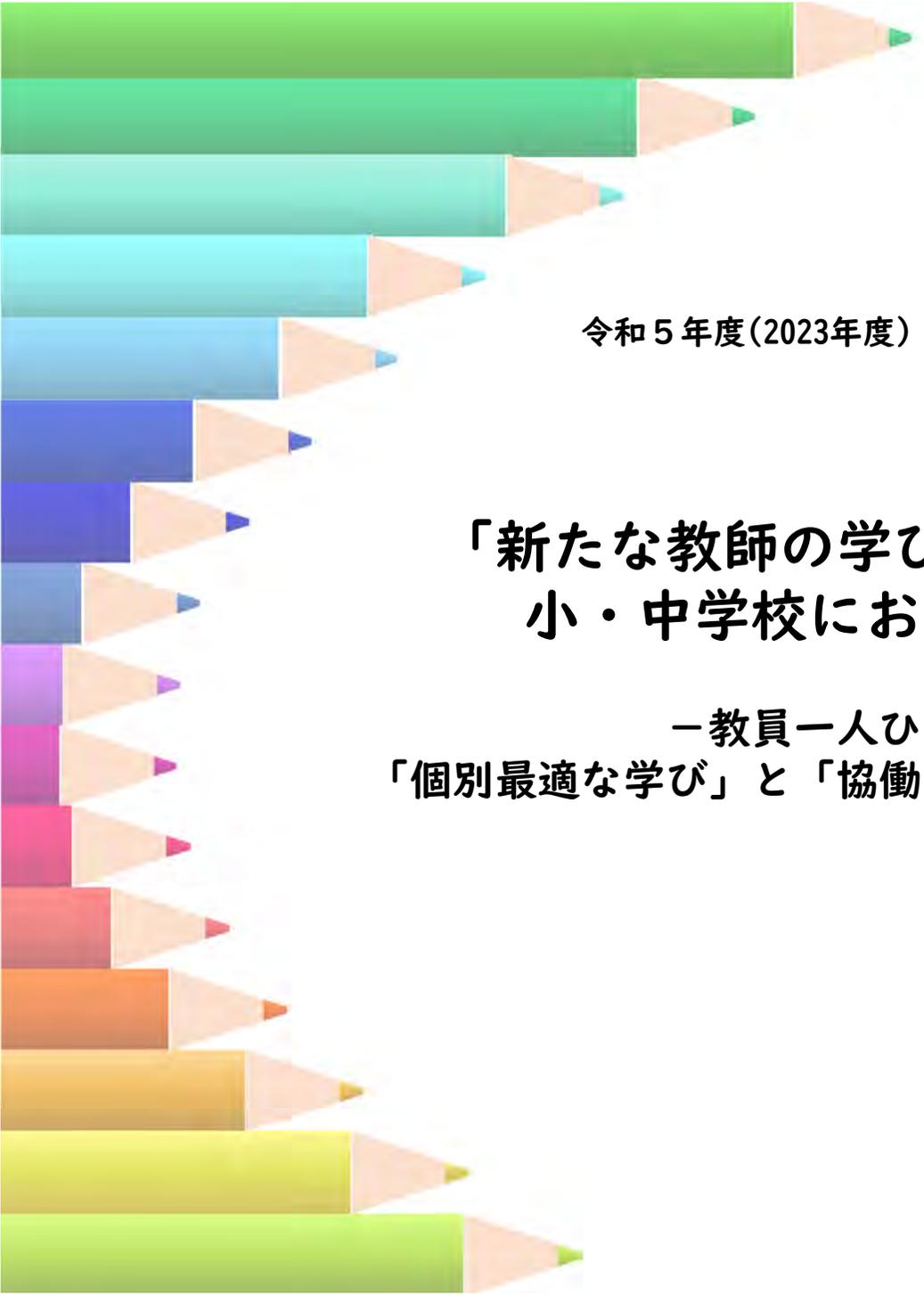
冒頭にも触れた通り、本研究の研究発表を100名以上の方が参観してくださいました。発表に際し、実践していただいたことの素晴らしさや価値をいかに伝えることができるかというプレッシャーを感じました。その一方で、これだけ多くの方に、5校の実践の素晴らしさを伝えられることができると思うと嬉しくもありました。発表後に参加者アンケートに目を通すと、私たちの研究発表を聞き、多くの刺激を受けたというお言葉をたくさんいただきました。これも偏に研究委員をはじめ実践校の皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

皆様の主体的に学びに向かう姿に毎度触発され、私たちもさらに主体的に研究に臨めました。これからも、目の前にいる子どもたちの成長のために校内研究をさらに活性化させていっていただきたいと思います。またどこかでお会いできる日を楽しみにしています♪



研究員 いぬます けいご 稲益 圭吾

研究員 しまうち ゆうしょう 島内 佑祥



令和5年度(2023年度) 校内研究活性化プロジェクト研究

「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう、 小・中学校における校内研究のあり方

— 教員一人ひとりのニーズに応じた
「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して—

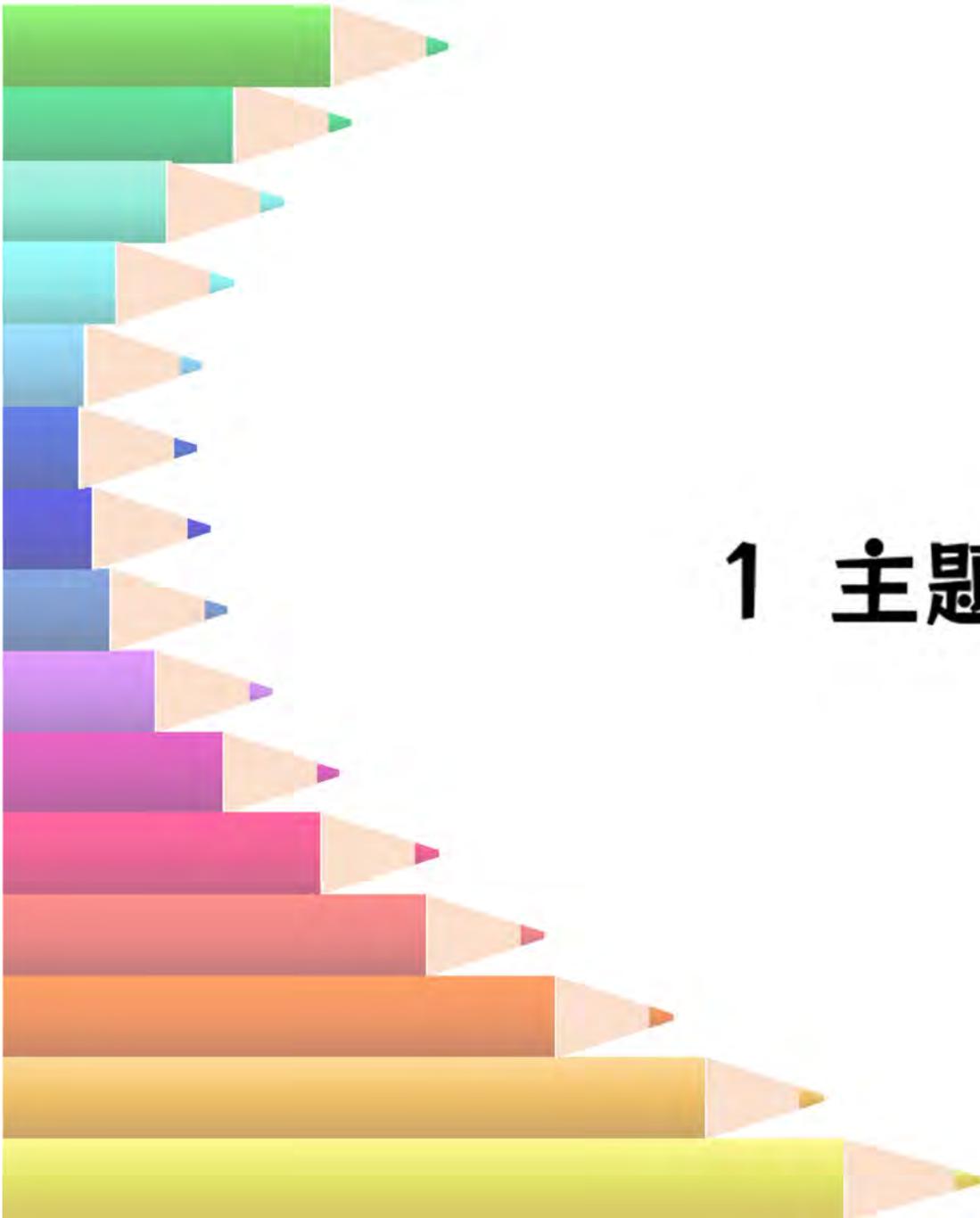
研究員 稲益 圭吾
島内 佑祥



発表の流れ

- 1 主題設定の理由
- 2 研究の基本的な考え方
- 3 研究の内容とその成果
- 4 研究のまとめ

1 主題設定の理由



中央教育審議会(答申)から

教師及び教職員集団の理想的な姿

「技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け」る姿

「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて

「一人一人の教師の個性に即した『個別最適な学び』」や「他者との対話や振り返りの機会を確保した『協働的な学び』」の実現による教員の学び(研修観)の転換が見童生徒の学び(授業観・学習観)の転換に向けて必要

文部科学省中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～(答申)」令和4年(2022年)より

「第Ⅱ期 学ぶ力向上滋賀プラン」から

子どものために一丸となって取り組む学校づくり

子どもに付けたい力を明確にした上で**校内研究を計画的に実践し、その充実を図る。**



児童生徒の学ぶ力向上の手立ての一つとして校内研究の推進が求められている。

当センターでも令和3年度、4年度に校内研究の活性化に向けて研究を進めました。

校内研究活性化のための研究の成果と課題

令和3年度

<研究主題>

小・中学校における全ての教員の授業改善につながる校内研究

<研究の成果>

校内研究の**組織的・継続的**な取組を充実させることにより、教員一人ひとりの自律的な学びを支えることができた。

リーフレット



論文



リーフレット



令和4年度

<研究主題>

小・中学校における児童生徒一人ひとりの「確かな学力」の向上につながる校内研究

<研究の成果>

自校の課題解決に向かう「**共通理解・共通実践**」に取り組むことで、児童生徒一人ひとりの「確かな学力」の向上にもつなげることができた。

リーフレット



論文



リーフレット



<課題>

- ・教員の児童生徒の学びの姿を見取る力量を高めること
- ・教員一人ひとりのさらなる学びの機会の確保が必要であること
- ・各教員のニーズ等に応じて選択できる学びの場が求められていること

本研究の主題と副題

令和5年度 校内研究活性化プロジェクト研究 研究主題

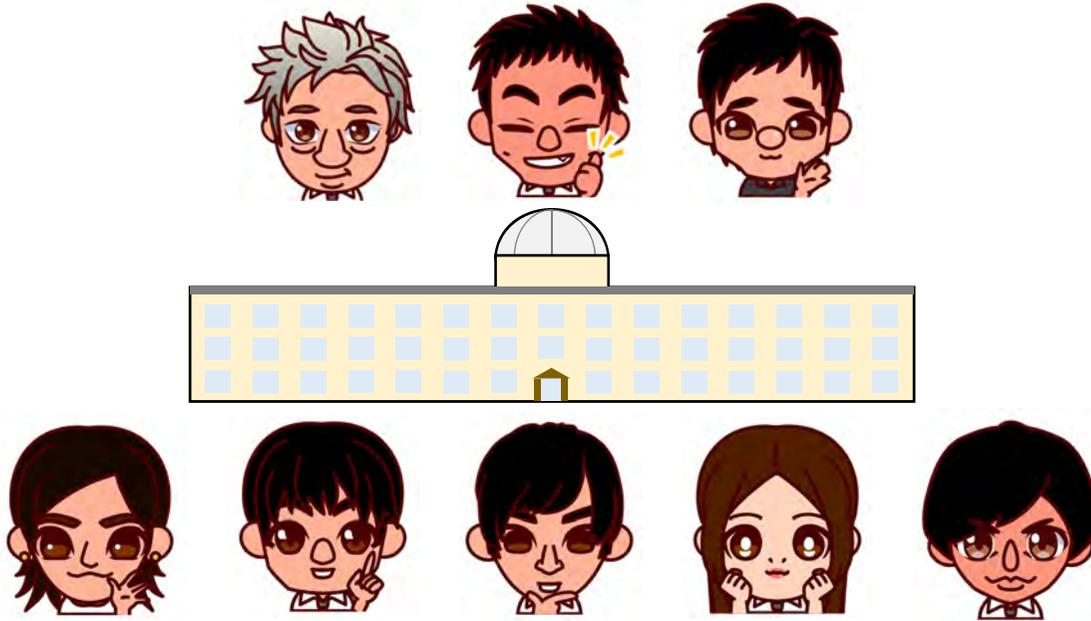
**「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう、
小・中学校における校内研究のあり方**

— 教員一人ひとりのニーズに応じた
「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して—

研究委員の学びの場

プロジェクト研究会(全8回)

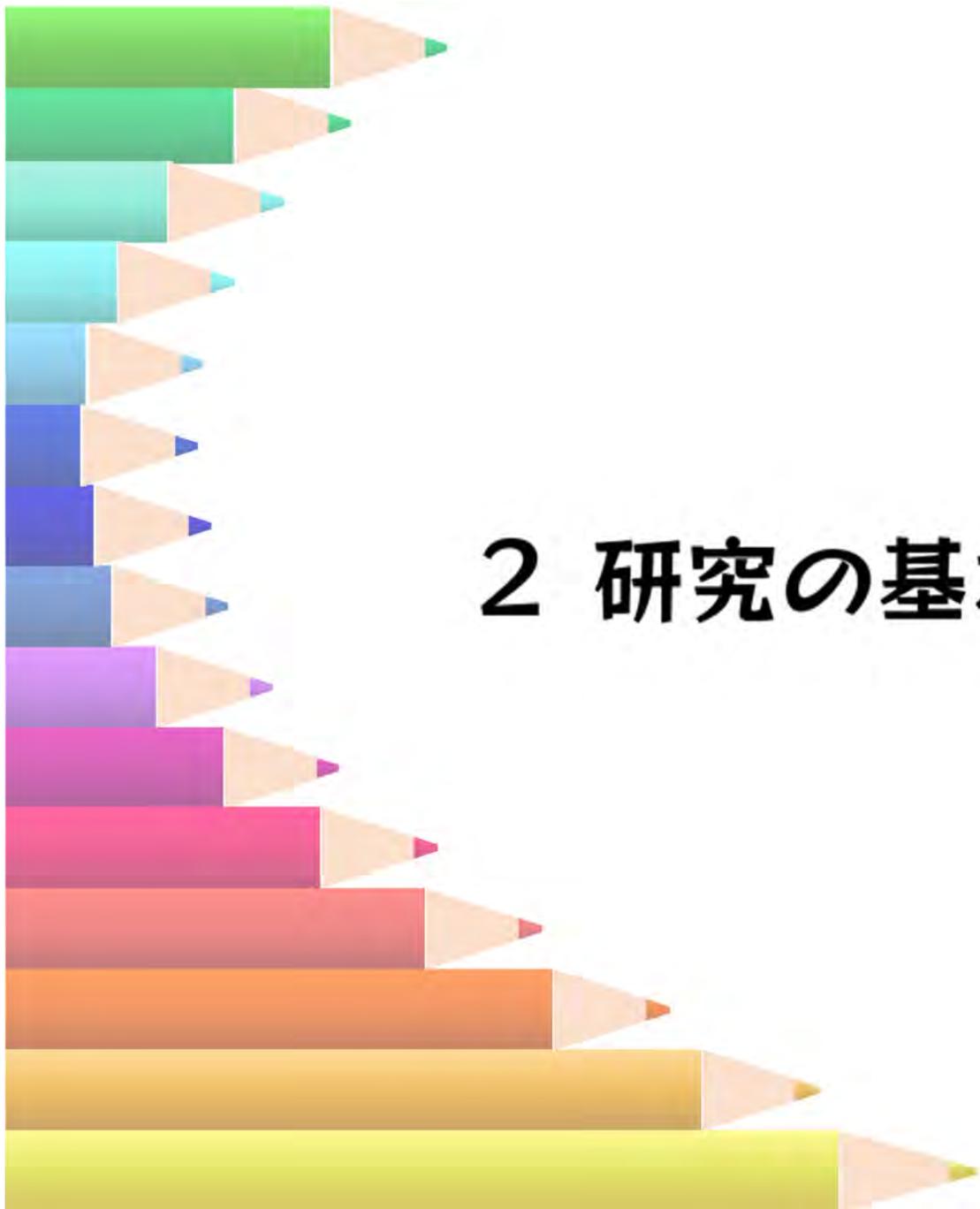
校内研究主任パワーアップ研修〔小学校・中学校〕(全3回)を含む



研究委員の声を生かして創設

研究委員が主体的に学びを進められるように研究を進めました。

2 研究の基本的な考え方



「新たな教師の学びの姿」を実現するには

- 変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという
「主体的な姿勢」

- 求められる知識技能が変わっていくことを意識した
「継続的な学び」

- 新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した
「個別最適な学び」

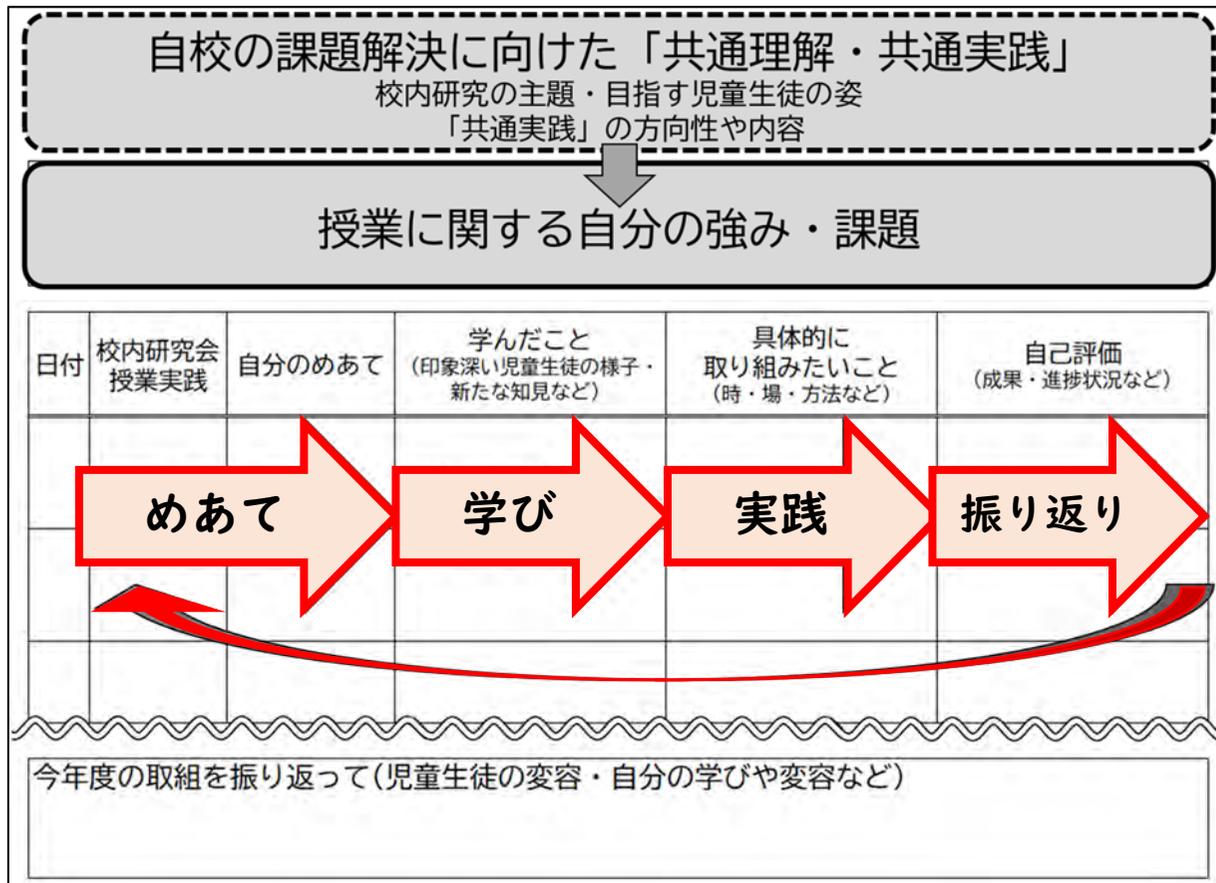
- 他者との対話や振り返りの機会を確保した
「協働的な学び」

一体的な充実を通して、主題の達成を目指す



教員の「個別最適な学び」

教員一人ひとりが強みや個性を生かして学ぶこと。



校内研究での学びと授業改善を往還するというPDCAサイクルを回すために活用する。



「授業アップ
デートシート」
の記入例

「授業アップデートシート」

教員の「協働的な学び」

他者との対話や振り返りの機会を確保し、異なる考え方が組み合わせられることで、「個別最適な学び」に生かされ、よりよい学びを生み出していくこと。



【学校全体で目指す児童生徒の姿】

学校全体で目指す児童生徒の姿

【実践で目指した児童生徒の姿】（ 月 日 時点）

目指す児童生徒の姿

【具体的な実践内容】（実践期間… ）

具体的な実践内容

【実践の成果と課題】

授業中の児童生徒の学びの姿 → 実践の成果・課題

★★★★★★★★★★★★★★ 改善策 ★★★★★★★★★★★★★★

☆次の実践で目指す児童生徒の姿

次の実践で目指す児童生徒の姿

☆次の実践内容（実践期間… ）

次の実践内容・実践期間

授業を参観していない教員とも具体的な手立て等を共有し、異なる考え方を組み合わせるために活用する。

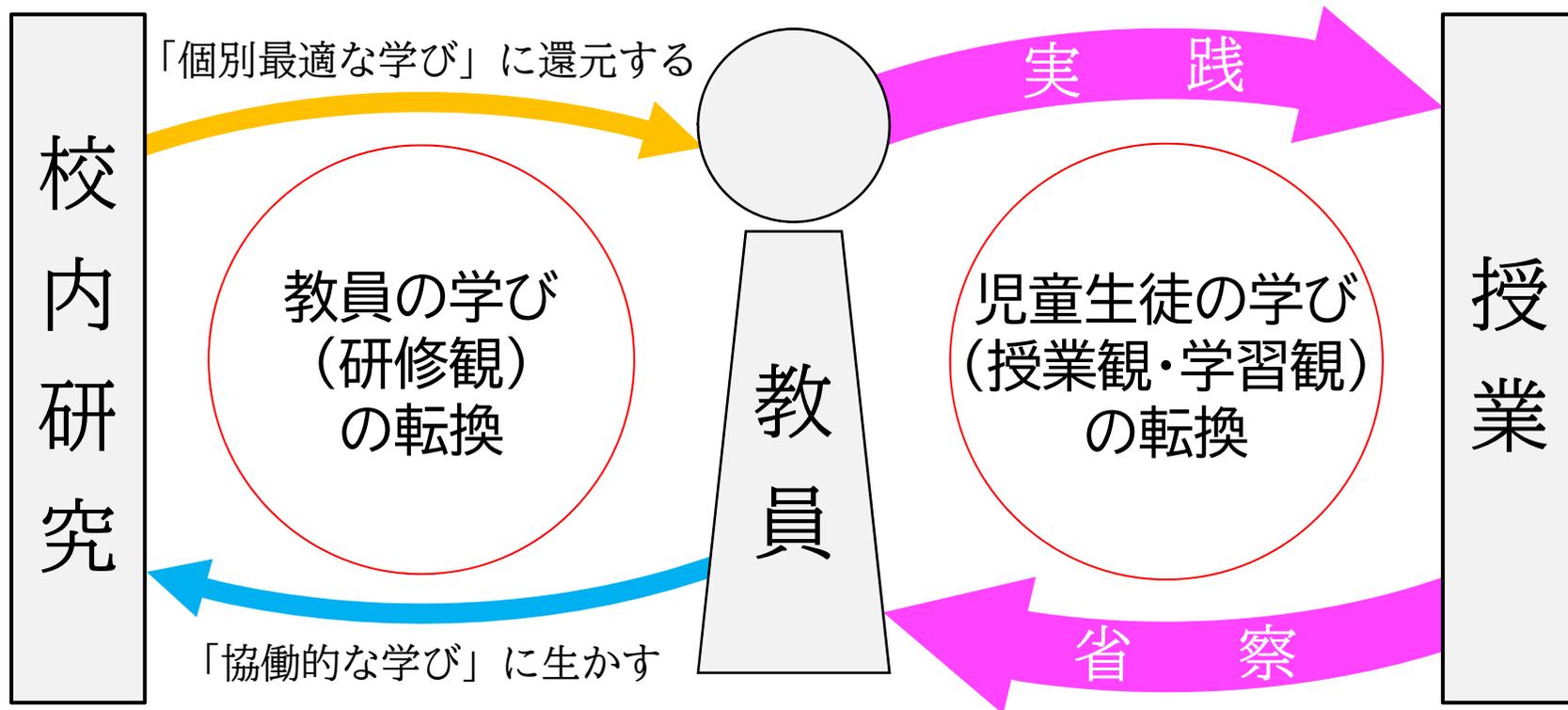


「『共通実践』レビューシート」の記入例

「『共通実践』レビューシート」

教員の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実と学びの転換

個人の学びの成果を、対話や振り返りを通じてよりよい学びにつなげ、さらにその成果を個人の学びに還元するサイクルを回すこと。



3 研究の内容とその成果

- 個 「個別最適な学び」が見られた実践
- 協 「協働的な学び」が見られた実践

実践①

「主体的な姿勢」を引き出し、
「個別最適な学び」を支える校内研究

実践① 「主体的な姿勢」を引き出し、「個別最適な学び」を支える校内研究

論文
p.8

W小学校

研究主題

自ら考え、表現できる子どもの育成をめざして
～日常生活と算数をつなぐ授業展開の工夫～

教員一人ひとりが自分事として校内研究に臨み、みんなで学びを積み上げて児童の学びにつなげていきたい！

目指す校内研究

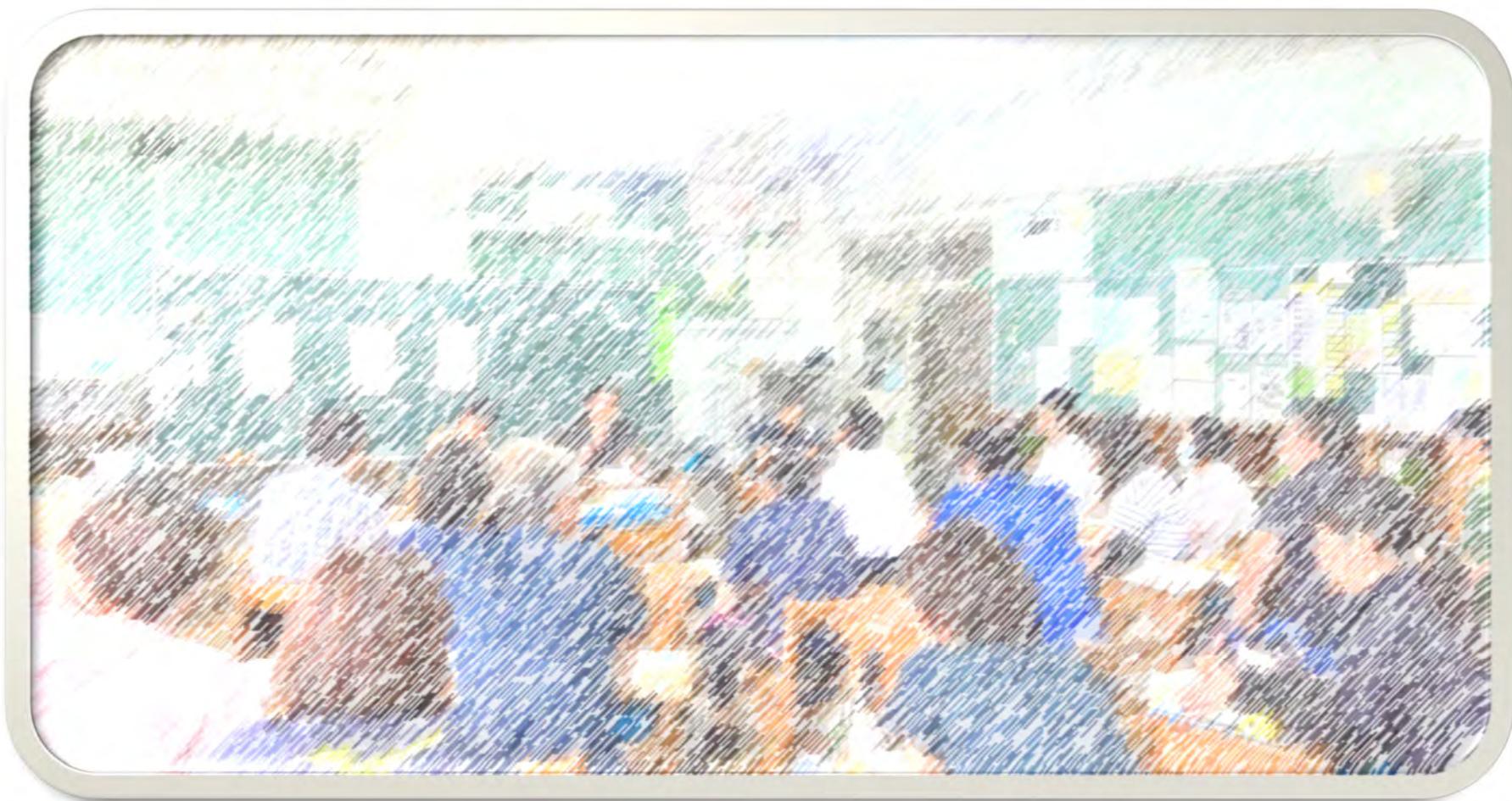
教員一人ひとりが「自分事」として捉え、
学びを深められる校内研究



校内研究主任

実践① 年度はじめの研究会の様子

論文
p.8



実践① SWOT分析から自校の現状を捉え直す

Strength (強み) :

- ・ 学年間の交流がしやすい。
- ・ ICTに詳しい教員がいる。
- ・ 地域とのつながりが強い。等

Weakness (弱み) :

- ・ 校内研究会や授業研究に意欲的に臨めていない。
- ・ 校内研究での学びが授業に生かされない。

強みを把握して
校内研究運営に生かそう！

弱み(課題)を把握して
教員の成長を促そう！



まずは「主体的な姿勢」を校内研究の取組を通じて引き出していこう！

実践① 校内研究に自分事として取り組めるように

課題①

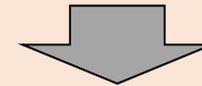
- 校内研究会や授業研究に意欲的に臨めるようにしたい。

校内研究を通じた学びを
教員一人ひとりが自覚し、
「自分事」として取り組ん
でほしいですね。



教員一人ひとりの PDCAサイクル

個



「授業アップデートシート」

授業アップデート 【記入例】		氏名 []			
校内研究の主題	自ら学び、考えを伝え合う児童の育成 ～児童の思考の流れを軸にした授業づくりを通して～				
目指す児童生徒の姿	<ul style="list-style-type: none"> めあてをもって学習する姿 書くことが好きな姿 よく考えて説明できる姿 自分から学ぼうとする姿 				
「共通実践」の方向性や内容	<ul style="list-style-type: none"> 児童の実態に即した課題設定・児童の学びの姿を的確に評価できる評価基準の作成 				
授業に関する自分の強み・課題	<ul style="list-style-type: none"> 強み 1時間の学習の足跡が分かる板書 ICTの活用→導入時の1人1台端末の有効活用(10/13) 課題 話しすぎてしまう。 児童の疑問やつぶやきから授業を展開していくこと。(6/16) 				
日付	校内研究 授業実践	自分のめあて	学んだこと (児童生徒の様子、新たな気づきなど)	具体的にに取り組むこと (例、場、方法など)	自己評価 (効果・達成状況など)
4/14	校内研究会①	めあてをもつ	学ぶ	学んだことを生かす(実践する)	振り返る
5/26	授業研究会② 2年生の 授業研究会	本題にせま おらい にせま 発問	学びの足跡が分かる指示 物が有効だと分かった。	児童が「やりたい」「考 またい」と思えるような課 題で、評価や発問、展開が定	単元の系統性を確認する ようになった。
6/16	授業研究会③ 特別支援学級 の授業研究会	生かせる支援の 方法	一目で分かるように示さ れているので、児童が安心 して学習に取り組んでい た。	示物をつくる。 ・ゲーム性を取り入れたが ら、「やたくなる」場面 をつくる。 ・児童の考えを基にした授 業展開にすることが大切で ある。	単元計画に沿って提示し た。 ・できる限り自分の話す時 間・言葉を尽くすように している。

実践① 校内研究に自分事として取り組めるように

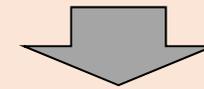
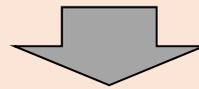
課題①

- ・校内研究会や授業研究に意欲的に臨めるようにしたい。

協働的に学ぶ機会を校内研究に設けることで主体的に学ぶことができるようにしました。



学び合う雰囲気をも高める



相互の
授業参観



「サックスシート」



授業者の課題に合わせて、
参観者に見てほしいことをリクエスト

授業者の
リクエスト
視点

サックスシート	
日時	令和5年 月 日() 校時
授業者	年 組 先生
リクエスト視点	<ul style="list-style-type: none"> ・交流が活発になる条件の設定や手立て ・交流の番号カードを渡すことでグループ作成がスムーズになっていました。新しい取組とのこといいアイデアだなと思いました。 ・導入の伝説も反応はよかったです。しょうか？ ・遊び心のあるもので楽しそうだなと思いました。

実践① 「個別最適な学び」を支える校内研究

論文
p.8

課題②

- ・ 校内研究での学びを授業に生かせるようにしたい。

似た課題をもつ教員と協議するので、互いの実践等からたくさんのヒントが得られます。



四つのグループを編制

協

「支援の仕方」
「板書の工夫」
「発問、声掛けの工夫」
「交流が活発になる
条件の設定や手立て」



実践① 「個別最適な学び」を支える校内研究

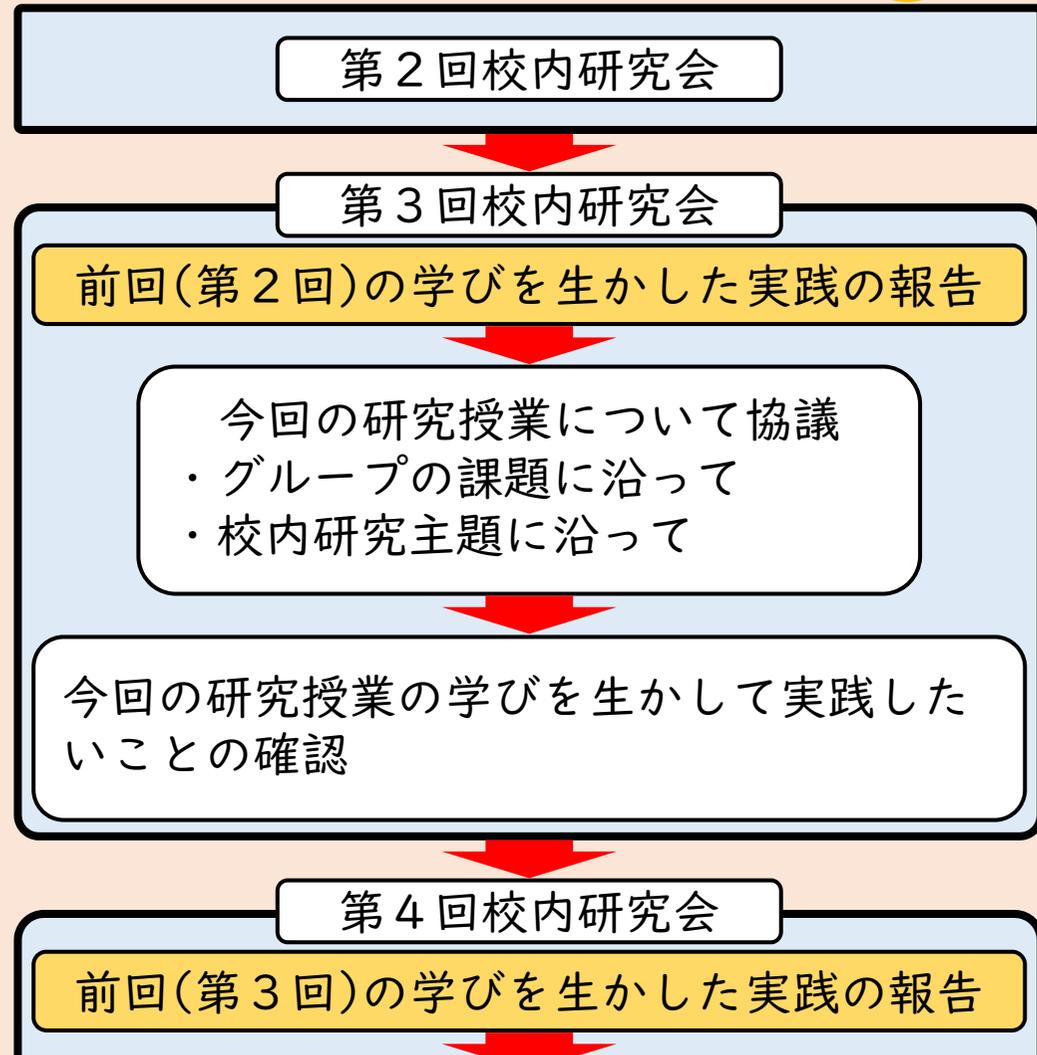
課題②

- ・ 校内研究での学びを授業に生かせるようにしたい。

校内研究会の始まりを実践の報告にすることで同僚がどのように学びを授業に生かしてきたかも共有できました。



校内研究会のもち方 **個**



実践① 11月の校内研究会の様子

論文
p.8

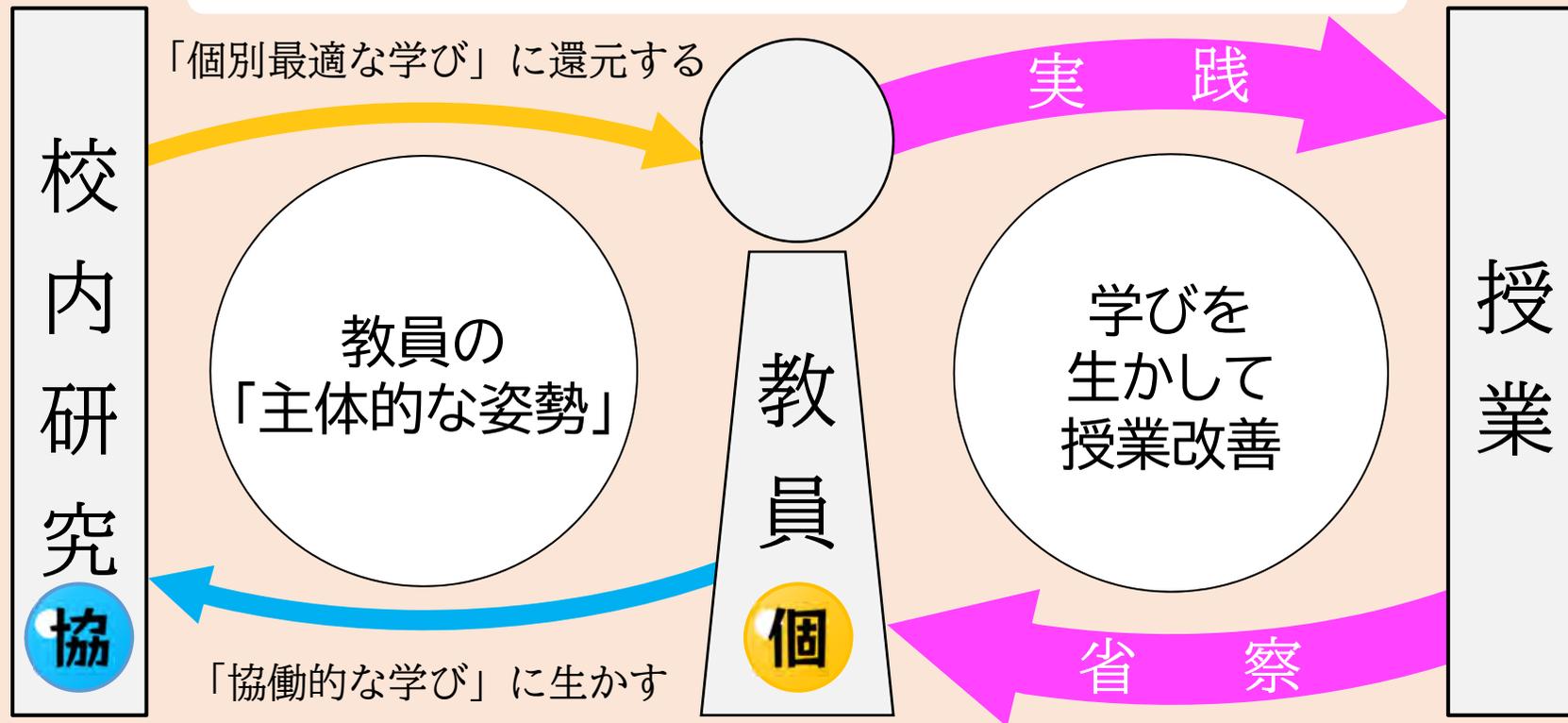
「発問、声かけの工夫」グループ



教員が自身の強みを生かしてグループ内の考えを広げた場面

実践① 実践のまとめ

教員一人ひとりのPDCAサイクル



「教員一人ひとりが『自分事』として捉え、
『個別最適な学び』を支える校内研究」の実現

実践②

「協働的な学び」が「個別最適な学び」
に生かされ、再び「協働的な学び」に
還元される校内研究

実践②

Y小学校

研究主題

課題に向き合い、他者と交流する中で、
自分の考えを再構築しようとする子どもをめざして

教員一人ひとりが充実した学びを行うことができるように、
様々な取組にチャレンジしたい！

目指す校内研究

「取組がシンプルでわかりやすい」と感じ、
前向きに参加できる校内研究



校内研究主任

実践②

「取組がシンプルでわかりやすい」と感じるために

論文
p.10

教員一人ひとりが目標や課題を把握していること

主体的に校内研究に参加できるように教員同士のつながりをつくること

1学期に取り組んだこと

「自己分析シート」の活用
(「授業アップデートシート」をアレンジしたもの)

個

校内研究・自己分析シート		氏名()	
校内研究の主題	課題に共通しい、共通と交差する中で、相違の考えを再構築しようとする子どもをめざして		
目的や研究主題の意	意図を大切に、自分の考えを認め、高め、再構築する		
「共通実践」の内閣性や内閣	互いの思いや考えを相手に正確に伝える力、相手の思いや考えを深く読みとる力、以上2つの力を高めることに重点を置いて授業づくりをする		
今の自分について	(課題に思っていること・得意に思っていること・もっと伸ばしたいこと)		
日付	校内研究 授業実践	学んだこと (授業の本質・新たな気づき)	具体的に取組むこと (場・場・状況)
5/14	5月1日 5月4日 5月7日		
5/21	5月14日 5月17日 5月20日		
5/28	5月21日 5月24日 5月27日		

協

- 学びの共有を効率化する
→ **ワールドカフェ方式の協議**
- 研究授業を見る力を高める
→ **OJTの活用**
- 校内研究での学びを共有する
→ **研究通信の発行**



実践② | 学期の取組の分析

個

1学期の校内研究の取組が終わった段階で、「『共通実践』レビューシート」を活用して取組を分析

【実践の成果と課題】

教員の具体的な学びの姿

	成果	課題
自己分析シート (個)	<ul style="list-style-type: none"> 自己分析 → 守りの課題はた 	<ul style="list-style-type: none"> 負担に思う教員 ふり返りの時間確保
研究通信	<ul style="list-style-type: none"> 共通理解が図れる → 時間短縮 学年毎に書いていく 	<ul style="list-style-type: none"> 時間をとるの"難"しい (作成の)
7-11市販 (部)	<ul style="list-style-type: none"> 色々の学年の意見を まくと → 学びの広がり 	<ul style="list-style-type: none"> 時間の向、課題 最後のまとめ → つみ上げ
OJT	<ul style="list-style-type: none"> 研究を振り返る視点の 	

成果
<ul style="list-style-type: none"> 教員同士のつながりを生むことできてきた 個人の課題設定ができてきた 学びの共有、広がり
課題
<ul style="list-style-type: none"> 個人の学びにはおとにめていく 時間のかたは



1学期の取組を振り返り、成果と課題を分析しました。課題がわかったので夏季休業中の実践で改善に取り組みました。

実践②

校内研究での学びを、個人の実践に生かす

論文
p.10

個人の課題をもとに**グループ**を編制 **協**

- ・ 個人の課題解決につなげる
- ・ 校内研究での学びを日々の実践で生かせるようにする



夏季の校内研究会の様子

個別最適な学びに還元

悩んでいる部分を共感できたり、改善策を出し合ったりできたので、いいと感じました。さらに、課題と目標が明確になったので、学びを進めるきっかけとなるよい時間となりました。

個



若手教員H

「話し合ったことで、自分の課題が整理された」「話し合いタイムが一番勉強になった」とプラスの意見を多く聞きました。

先生方に多くの時間を委ね、任せることが、校内研究という学校全体の学びのうえで、最も有効で近道なのではないかと気付かされました。



実践②

校内研究での学びを、個人の実践に生かす

論文
p.10



授業者の学びを、学年の教員で支える
「協働的な学び」の機会の設定を促す

事前授業を通して、どのような手立てが有効かを、
学年で一緒に考えていきましょう！



個

若手教員H
(研究授業の授業者)の
個人目標

児童が自分の
思いを伝える力
を伸ばしたい

協働的な学びに生かす

学年での指導案検討会

児童が自分の思いを伝える
力を伸ばすために、各学級で
様々な手立てに取り組んでみ
ましょう。



協

学年の取組のめあてに組み込んで
日頃から一緒に実践していこう！



個別最適な学びに還元する

協働的な学びに生かす

各学級での
実践



個

実践②

校内研究を振り返った若手教員Hの声

論文
p.10

公開授業を終えた
今の思いを教えてください。

公開授業を終えて
子ども達の様子に
変化は見られますか？



若手教員H

- ・ 事後研究会も学びが得られたが、それ以上に、公開授業までの取組で多くの学びを得ることができた。
- ・ 子ども達の様子を以前と比べてみると、「自分の気持ちを話してみたい」という気持ちが出てきたと感じる。

(若手教員Hへのインタビューより)

実践② 実践のまとめ

論文 p.11

互いに強みや課題・悩みなどを把握

「協働的な学び」

「協働的な学び」を「個別最適な学び」に生かし、再び「協働的な学び」に還元させて、教員の学びを広げたり、深めたりすることができた。さらに、児童の学びの変容まで見取ることができた。

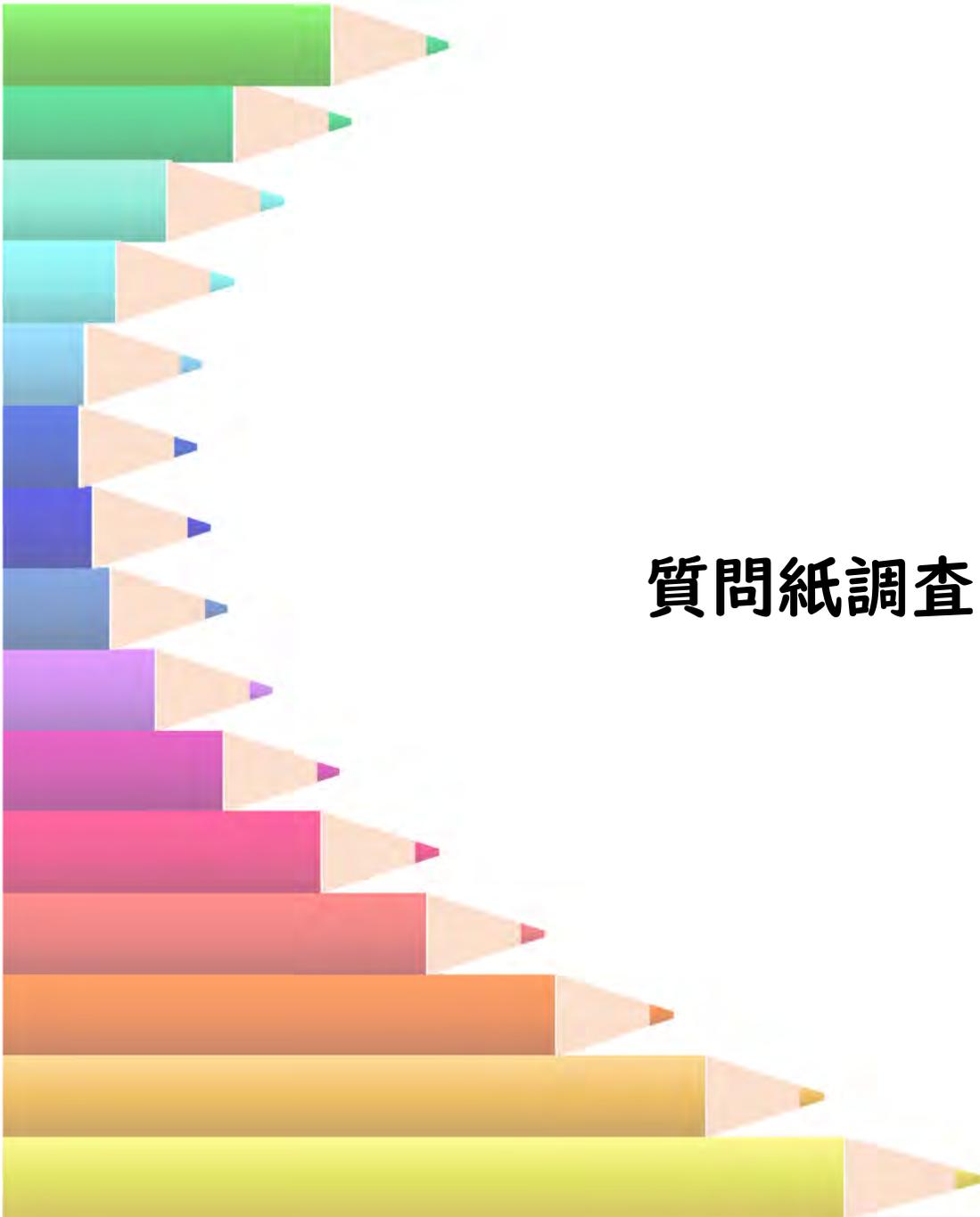
主題設定の理由

研究の基本的な考え方

研究の内容とその成果

研究のまとめ

質問紙調査の結果より



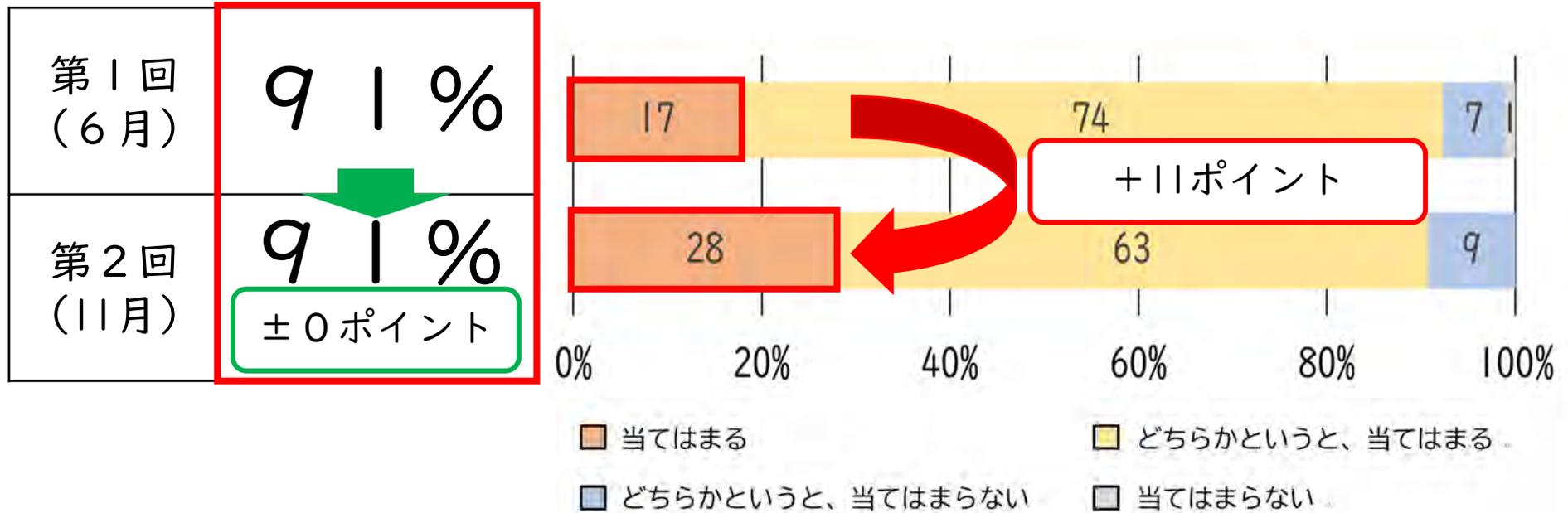
教員の質問紙調査の結果より

	①児童生徒が個別最適に学ぶ姿をイメージできる	②児童生徒が協働的に学ぶ姿をイメージできる	③一体的に充実させることを意識して指導している
第1回 (6月)	81%	91%	52%
第2回 (11月)	92% +11ポイント	91%	58%

* 令和5年度校内研究活性化プロジェクト研究実践校の教員対象質問紙調査の結果
回答総数 第1回：91人 第2回：86人

教員の質問紙調査の結果より

設問② 「児童生徒が協働的に学ぶ姿をイメージできる」



教員の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の経験

具体的な、児童生徒の
「個別最適な学び」「協働的な学び」のイメージ

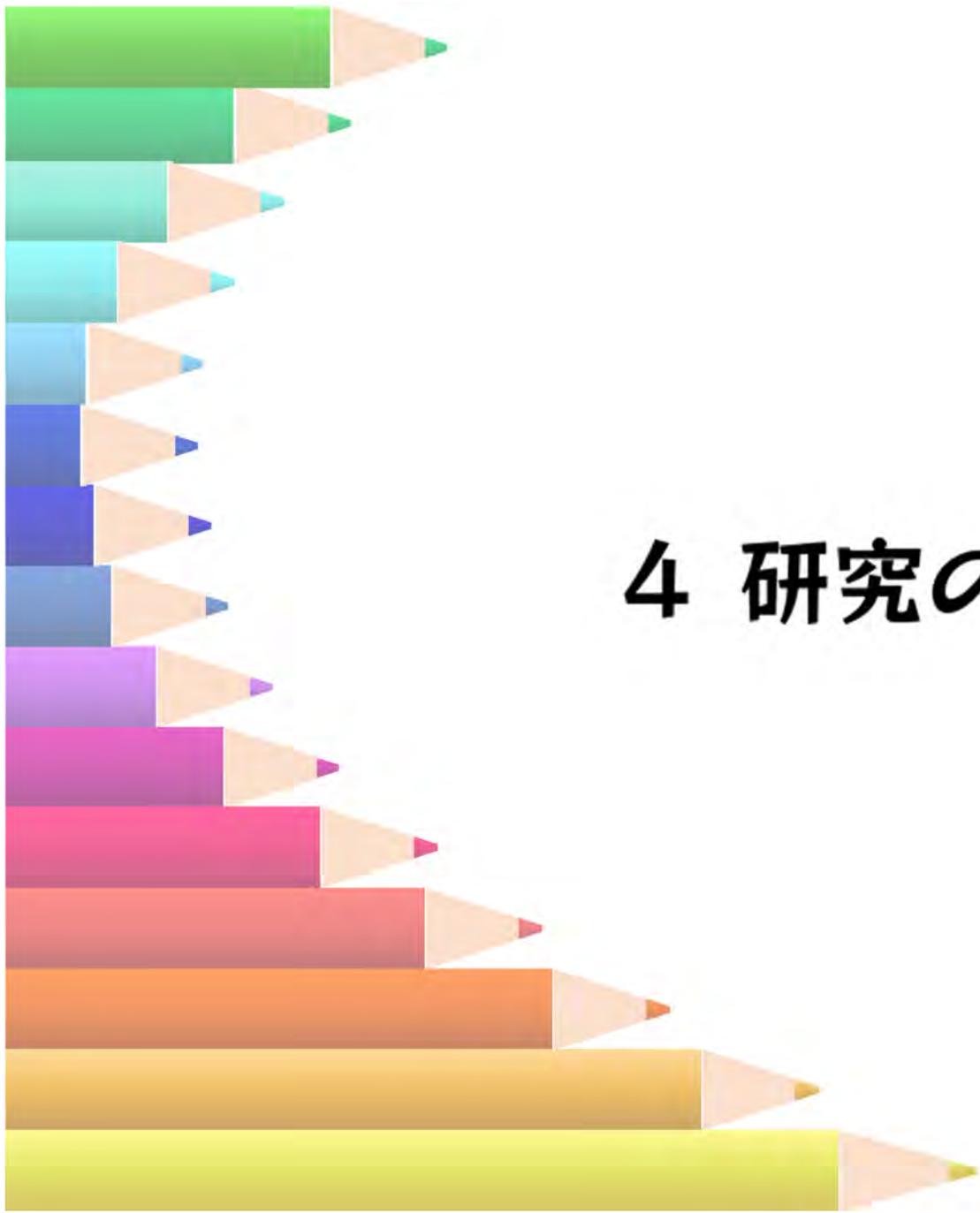
教員の質問紙調査の結果より

	①児童生徒が個別最適に学ぶ姿をイメージできる	②児童生徒が協働的に学ぶ姿をイメージできる	③一体的に充実させることを意識して指導している
第1回 (6月)	81%	91%	52%
第2回 (11月)	92% +11ポイント	91% ±0ポイント	58% +6ポイント

* 令和5年度校内研究活性化プロジェクト研究実践校の教員対象質問紙調査の結果
回答総数 第1回：91人 第2回：86人

児童生徒の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を意識して指導されている教員が増えた

4 研究のまとめ



本研究の成果

校内研究を自分事として取り組める工夫
「主体的な姿勢」

実践と省察のサイクルを回すこと
「継続的な学び」

教員一人ひとりのニーズに応じた協議の場の設定
「個別最適な学び」と「協働的な学び」
の一体的な充実

教員の学び(研修観)の転換

「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう校内研究

今後の課題

- ①校内研究会での「協働的な学び」を契機として教員の学び(研修観)の転換と授業改善が進み、一部の児童生徒の学びの姿に変容が見られた。今後、主体的・対話的で深い学びの実現に向けてよりよく学ぶ児童生徒の姿を目指して、**校内研究を通じた教員の「個別最適な学び」の充実が必要**だと考える。
- ②「新たな教師の学びの姿」を実現し続けていくためには、校内研究主任のみならず**同じ分掌を一人で担当する教職員同士を学校間でつなぐ**ことのできるICTを活用した仕組みの構築が望まれる。

令和5年度(2023年度) 校内研究活性化プロジェクト研究

「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう、
小・中学校における校内研究のあり方

一教師一人ひとりのニーズに応じた「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して＝

内容の要約

本研究では、校内研究の取組を通して「新たな教師の学びの姿」の実現を目指した。校内研究主任が中心となり、各校の実態や校内研究の主題と、教員一人ひとりのニーズとのつながりを見いだすことで、校内研究に「主体的な姿勢」で取り組むことができるように工夫し、研修と実践の仕方を通じて「協働的な学び」を支える取組を行った。校内研究会では、教員の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して教員同士の学びをつなぐ取組を行った。こうした取組を通して、「新たな教師の学びの姿」の実現は、個々の教員

研究論文

Ⅰ 主要研究の理由 (1) VI 研究の内容及その成果 (6)

Ⅱ 研究の目標 (1) 1 研究委員の学びと実践 (6)

Ⅲ 研究の仮説 (2) 2 本研究での特徴的な学びの機会の確保 (7)

Ⅳ 研究についての基本的な考え方 (2) 3 教員の「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実 (8)

1 「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて (2) 4 児童生徒の学び(授業観・学習観)の転換へとつながる教員の学び(研修観)の転換 (11)

2 教員の学び(研修観)の転換による授業改善とその成果の検証 (4) 5 教員および児童生徒の定着 (13)

3 教員の学び(研修観)の転換を推進するための研修と実践の仕方を (4) 6 研究のまとめと今後の課題 (14)

4 教員の学び(研修観)の転換に向けた教員と管理職との連携 (5) 1 研究のまとめ (14)

V 研究のまとめ (5) 2 今後の課題 (14)

1 研究の方法 (5) 文 献 (14)

2 研究の経過 (8)

道真県総合教育センター
編集 志音 島内 佑輝

授業アップデート

氏名 []

校内研究の主題	
校内研究会の中心	
「授業アップデート」の目的や趣旨	
授業に関する校内研究の「課題」	
期	

日時 校内研究 自由の時間 学業に集中 異校間(遠隔)による 自己研修

各種シート

新着情報一見

令和5年度校内研究活性化プロジェクト研究

「新たな教師の学びの姿」
の実現に向かう校内研究

主体的な姿勢
個別最適な学び
協働的な学び

リーフレット

校内研究の工夫が
教師を変える

「新たな教師の学びの姿」を校内研究活性化の原動力に！
先生の学びにも「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を！

9割以上
超え

研究成果・教材・コンテンツ等

センター研究成果情報
最新情報です！ぜひご活用ください！

研究発表会 研究成果

研究成果情報…センターで行ってきた教育研究の成果をご覧いただき、授業等にご活用ください。

校内研究省察ポスター

学校 校内研究

自己考え、表現できる学びの育成を促して
～児童生徒の学びの姿と授業実践の工夫～

「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実

「新たな教師の学びの姿」の実現を目指して

「新たな教師の学びの姿」の実現を目指して

「新たな教師の学びの姿」の実現を目指して

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第1号 令和5年(2023年)5月29日発行

通信が届けられるようになりました。先日は第2回プロジェクト研究会に御参加いただきありがとうございました。今回のプロジェクト研究会でも、校内研究を通して子どもたちを育てたいという研究委員みなさんの熱意がひびくと見させていただきました。校内研究活性化プロジェクト研究通信(以下、研究通信)では、研究会での学びが研究委員のみなさんの心に残るよう、ぜひ活用していただきたいと思います。この通信が研究委員のみなさんの振り返りになるだけでなく、実践者のみなさんの校内研究活動の一助となることを願っています。

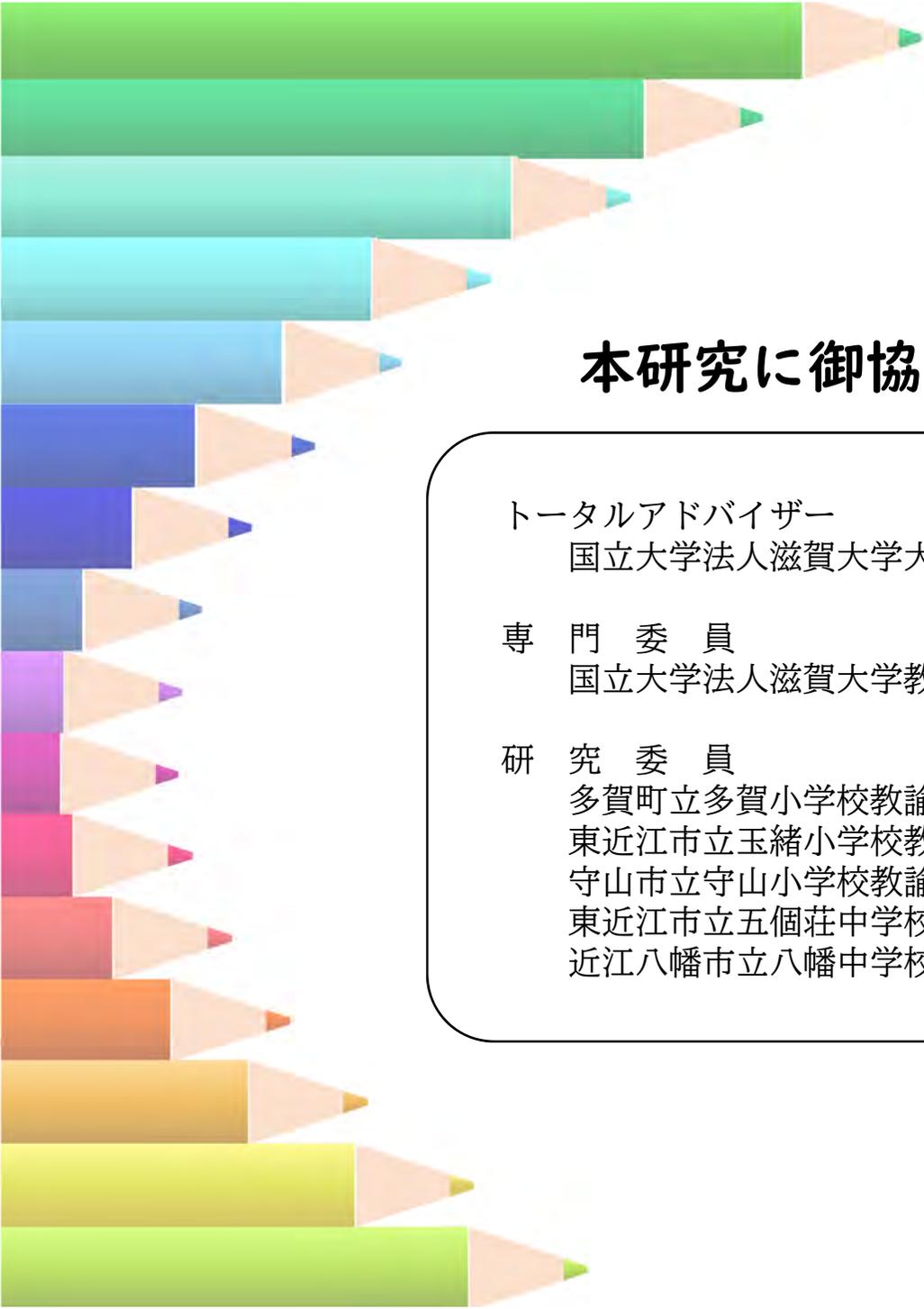
プロジェクト研究通信

「個別最適な学び」
●他者の対話や振り返りの機会を確保した

「協働的な学び」

「新たな教師の学びの姿」の実現を目指して

校内研究会を通して、先生方が自身のニーズに応じて主体的に学び、支えることで授業改善が図られ、子どもたちの学びが広がっていることへの校内研究会、今年度は道真県総合教育センターのプロジェクト研究会を通して実践者のみなさんへお礼を申し上げます。



本研究に御協力いただいたみなさま

トータルアドバイザー

国立大学法人滋賀大学大学院教育学研究科教授

辻 延浩

専門委員

国立大学法人滋賀大学教育学部附属小学校副校長

楠見丹生子

研究委員

多賀町立多賀小学校教諭

奥村いつ子

東近江市立玉緒小学校教諭

辰巳 彰啓

守山市立守山小学校教諭

井上 理奈

東近江市立五個荘中学校教諭

安居 新

近江八幡市立八幡中学校教諭

西山 晶博